



明峰

令和8年9月24日

第14号

校長 岡野利男

※シルバーウィークもあっという間に過ぎ去りました。今週の校長室黑板は、「16の国民の祝日の意味を知ることって大切」という内容にしました。まずは、16の国民の祝日をちゃんとと言えるか、確かめてみてください…。

～ 対話と会話 ～



左の写真は8月10日の長崎新聞に掲載されていたものです。左は、8月9日平和祈念式典で「平和への誓い」を読み上げた本村チヨ子さん(87)。右は、アメリカ・ハワイ州在住のドリン

ダ・ニコルソンさん(90)。二人は、約8か月ぶりの再会を喜んで、抱き合っておられます。この二人の間に起きたこと…。私は、NHKの特番で知りました。

本村チヨ子さんは6歳のとき、爆心地から約4.5kmの自宅で被爆された方です。その本村さんを含む「長崎県被爆者手帳友の会」の一行が、昨年11月末から約2週間、アメリカ合衆国を訪問されています。その訪問団には、同会の会長である朝長万左男さん(この方はテレビ等でもよくお見かけしますね。)もいらっしゃいます。

友の会一行が訪れた主なアメリカの地は、「ニューメキシコ州」と「ハワイ州」。この二つを訪問先としたことだけでも私には大変な驚きでした。ニューメキシコ州は核兵器開発中枢の地、そして、ハワイは日本軍が真珠湾攻撃を仕掛けた太平洋戦争発端の地。様々な立場から「戦争」を捉え、様々な意見の人がいる、その場に身を投じることを被爆者の方がなさる、その行為の重さを感じたからです。

原子爆弾は、ニューメキシコにある「ロスアラモス研究所」で開発され、そのための実験もこの地で行われています。言うまでもなく、ここは、核兵器に誇りを持つ土地です。今も多くの研究者やその家族が住み、経済が成り立ちます。右下の写真は、そう言える根拠のひとつ。これは、本村さんや朝長さんたちが現地にて立ち寄ったビール醸造店のメニューです。ATOMIC TURKEY(アトミックターキー)や CUBANOMISSILE(キューバミサイル)、そして PATRIOT(パトリオット)等の名称で、様々な種類のホットサンドが並んだメニュー。本村さんや朝長さんはどんな思いでこのメニューを見て、注文したのだろう…。何とすごい企画なのだと思います。にはいられませんでした。



番組中、本村さんや朝長さんが口にしていた言葉。それは「この旅は【対話の旅】です。」ということ。

対話とは相手との違いを大切にし、価値観をすり合わせていく営み。対話は、「あなたの考えに同意はできないけれど、あなたの言っていることは理解できるよ。」を試みる営み。だから対話と会話は違う。でも「会話」のない関係に「対話」は成立しない。大切なのは「対話と会話の往還」です。

これは、4月、私が本校の先生たちに伝えた言葉です。いや、実は、有名な劇作家平田オリザさんの言葉として聞いていたことを私なりに咀嚼したものです。本村さんや朝長さんの行動は、このことを言い当てているようではありませんでした。

番組では、先述のロスアラモス研究所の元所長と朝長万左男さんとの「対話」の様子も流れました。《核兵器開発の即時撤廃》を主張する朝長さんと、《即時撤廃は時期尚早だ》を主張する元所長との対話。「ウクライナやガザでの争いが通常兵器にとどまっている理由」や「無くすべきは核兵器ではなく核戦争ではないか」という元所長の意見。さらに元所長は「いつかは核兵器を廃絶すべきだ。」との考えも併せ述べます。朝長さんは対話によって、元所長に一定の理解を示していくのです。

友の会一行が、ハワイを訪れたのは現地時間の12月7日。84年前に真珠湾攻撃がなされたその日です。そこで、本村チヨ子さんと「対話」したのが、冒頭写真のドリングさん。「日本を恨んでないか？」の本村さんの問いに、「いいえ。確かに、6歳だった私の記憶に、奇襲攻撃したパイロットのゴーグルがはっきりと残るほどの爆撃だった。でも、私たちの国もあなたの国に爆弾を落とした。私とあなたは友達。戦争をしていてもいつかは分かり合うことができる。」とドリングさん。本村さんの涙ながらの「こんなにも広いお心でいてくださって。それなのに私は…。ハワイに来て本当によかった。」が深く残りました。

人が人と生きていく限り「価値観の違い」は必ず生じます。「あなたに同意はできないが、あなたの言っていることは理解できる。」その擦り合わせが対話です。そして、対話を可能にするのが会話できる関係。だから対話と会話の往還は大切です。1年の半分以上が経過しようとする今、改めて確認したいこととして、今号のテーマとした次第です。